楽しく美しいまちづくり通信…㊴

一生懸命まごころを込めて編む米寿の名人

竹ざる名人
南館浅吉（みなみだてあさきち）さん（88歳）

折爪岳の山すその集落・坂本地区は、竹細工に使われる「シノ」と呼ばれる良質の鈴竹が、近くの山野にたくさん自生しており、昔から竹ざるの産地として有名でした。地元の人は「昔は、竹を編めない人はいないといってもいいほど、どこの家でも竹ざるを作っていた。」といいます。

浅吉さんが竹細工を本格的に始めたのは、四十歳ごろだったそうです。それまでは、炭焼きや木切りとして青森や秋田の山奥まで出かけ、山仕事をしていましたが、子どものころ、隣の家の竹編みを毎日見て育ち、いつかはやってみようと思っていたので、年を取る前に転職したそうです。

しかし、見ていた時とは大違い、売れるものを作るため、何年も試行錯誤を繰り返し、技を磨いていったそうです。その竹ざる作りの工程は、春や秋に採取した鈴竹の皮をむき、四つ割りにし、肉の部分をけずり取って、三日間ほど天日に干し、保存します。そして、編むときには、二、三日前から水に浸しておき、「ざる編み」という編み方で底から編み上げ、芯（しん）になる縁竹に巻きつけて仕上げます。

坂本地区では、「箕（み）ざる」「丸ざる」を主に作っています。そのほか、頼まれると「カッコベ」と呼ぶかごなども作ります。また、松の根を燃やした時に出るススで、黒く染めた竹を編み込んで模様を付けることもあります。浅吉さんは、いつも日当りのいい部屋でやさしい笑顔で世間話をしていますが、一度、仕事場に入ると鋭い眼光、人を寄せつけない気迫で一気に編んでいきます。そして、一つのざるを編み終えて「やはり、人に喜んでいただけるものを作るには、一生懸命、まごころを込めて作らなければいけない」とやさしい顔で話してくれました。

また、竹編みを習いに、仕事が休みのたびに通ってきていたお弟子さんも、今は一人前になったといいます。若い時分、木切りとして、また郷土芸能「七ツ物」の名人として鍛えた体も、米寿を迎え、足腰が曲がり、目も大分見えなくなってきたそうです。浅吉さんは、竹編み人生の締めくくりとして、今年から五百組の「三つ重丸（かさね）ざる」作りにチャレンジしています。何年かかるか分かりませんが、一つ一つ、八十八年の人生を振り返りながら、こつこつと編んでいます。

丸ざると黒い竹の模様が入った箕（み）ざる

こよみ

7月11日～8月10日

★7月★

11日（木）母親学級（市保健センター）
12日（金）
13日（土）
14日（日）市内体力づくり野球大会（福岡中学校ほか）
15日（月）
16日（火）四ケ月児健康診査（市保健センター）
17日（水）
18日（木）市民生活相談（市役所市民相談室）
19日（金）
20日（土）海の日、勤労青少年の日
21日（日）姫蛍観賞会（折爪岳山の家前）、第15回市内スポーツ少年団ソフトボール交流大会（大平球場）
22日（月）大暑
23日（火）一歳六カ月児健康診査（市保健センター）
24日（水）
25日（木）
26日（金）
27日（土）土用の丑の日
28日（日）
29日（月）
30日（火）
31日（水）16ミリ映写機操作技術講習会（図書館）

★8月★